

地域は舞台 島の旅社推進協議会（三重県鳥羽市）

文 阿川尚之 写真 鈴木勝

島と人と 時の流れと

三重県鳥羽市 答志島・ 神島への旅

島の旅社推進協議会

伊勢湾の入り口に浮かぶ4つの島での、生活に根ざした魅力や楽しさを、都会の人々や子どもたちに日常そのままの形で体験してもらおう。そうした「島の旅」をプロデュースする「島の旅社」が2004年に誕生。無人島での「浮島自然水族館」、

迷路のような路地を歩く「路地裏つまみ食い体験」、ベテラン海女さんが焼いてくれる鮑やイセエビを味わう「海女小屋体験」などを、島の女性たちが家業や海女の仕事の合間を縫って企画・運営。2010年サントリー地域文化賞受賞。



中央のエプロン姿は濱口勝代さん、時計まわりに山本智恵さん、濱口ちづるさん、濱口一利さん、筆者、編集者、山本加奈子さん。

「ティー」という広告を見て、それにつられて島に来たら、漁師である現在のご主人に出会って、そのまま結婚し居着いた。こんなに頼もしい男は大阪にいない、一目惚れだった。

次は大春寿司の濱口勝代さん。彼女も大阪出身。会社につとめ、スキューバダイビングなどしていて、結婚が遅れる。スポーツ新聞で島の婚活を知った同僚に勧められ、やってきた。気づいたら、寿司屋のおかみになっていた。

山本智恵さんは奈良県の高の原からお嫁にきた。産経新聞で島の婚活を知ったお父さんの勧めで参加し、伴侶をみつけた。ご主人は漁協に勤めている。中村佳代子さんは答志の出身。島を出て大阪梅田で働いていたが、帰島して海女になった。定期船の発着する桟橋でも働いている。彼女がデザインしたTシャツを、島中の人が着ている。この夜集まった女性五人のうち、島



町内会、婦人会、老人会、漁協などからなる協議会のまとめ役の濱口一利さん。

から出ていないのは先ほど棧橋であいさつした、ちい姉さんだけである。答志で生まれ育ち、島を出たいと思ったことはある。ずっと悩んだが、結局残って本格的な海女になった。

島の旅社の実行部隊は、みな女性である。しかも島の外から嫁入りしてきた人が多い。なぜだろう。その答えは、先ほどからにこにこして話を聞き、ときどき口を挟む唯一の男性、濱口一利さんが知っているはずだ。

濱口さんは島の旅社の良き相談相手である。答志生まれの漁師であり、漁業組合長をつとめた。いまは市議会議員の職にある。濱口さんたちが島の旅



鳥羽から和具・答志行き
定期船は1日10便。

が見え、右舷方向には坂手島、菅島が連なる。船首方向、かなり遠くに見えるのが神島だ。

答志島和具の定期船乗り場で我々を迎えてくれたのは、島の旅社の山本加奈子さん(通称かなちゃん)と濱口ちづるさん(通称ちい姉さん)の二人である。かなちゃんは、私たち三日間の島の旅全行程につきあってくれた。

島の旅社は、答志島、神島、菅島、そして坂手島の人たちが、島のすがたを来島者にもっと見て、知って、体験してもらおうと始めた、地域のボランティア組織だ。話を聴くために、その夜、宿の近くの大春寿司に集まってもらった。

島の旅社の「かなちゃん」たち

みなさんそろったところで、それぞれ自己紹介をお願いする。

まずはかなちゃん。大阪出身。会社勤めをしていた。あるとき産経新聞で「あわび伊勢エビ食べ放題の婚活パ-



当日開かれていた島の運動会では、多くの人たちが色とりどりのオリジナルTシャツを身に付けていた。

島へ

三重県鳥羽市佐田浜を一五時四五分定時に出港した鳥羽市営定期船の第27鳥羽丸は、東へ針路を取り、エンジン音を軽快に響かせて航走しはじめた。本船の左舷方向に答志島の南の岸

なんびとも孤なる島にあらざ、独り立つにはあらざ、みな大きな陸の切れはし、海原のなかにあり

● ジョン・ダン

社の構想を立てたとき、実行を託したのがかなちゃんたち、関西からやってきた、関西弁でいえば「おかん」たちであった。島のことを何も知らないまま嫁にきて、苦勞しながら島育ちの夫を支え、地域にとけ込んでいる。上方の女の、独特のたくましさがある。外から来たからこそ、島のよさも難しさもわかるし、来島者に説明できるだろう。そう考えたようだ。

答志の夜、話は弾んだ。答志島には、答志(島の東側)、和具(島の南東側)、桃取(島の北西側)の、三つの町がある。人口二二〇〇、それほど大きな島でないのに、集落によって驚くほどいろいろなことが違う。同じ漁業でも、捕るものが違い、漁法が違う。言葉が違う、苗字も違う。祭りが違い、気質が違う。濱口さんによれば、桃取の人は几帳面で、緻密で、慎重である。答志の人は豪快だ。桃取の人は対岸の本土から

渡ってきて住み着いたのだろう。半農半漁で暮らしている。答志や和具の人は海からやってきたのだろう。紀伊半島の南端、土佐、九州、沖縄、さらにはもつと南の島々と交流があったようだ。離島と言っても答志島は絶海の孤島ではない。はるか昔から本土との交流があった。島の神社や祭事は海とのつながりを強く感じさせる。戦国時代に

は九鬼水軍の支配下にあった。九鬼家は関ヶ原の戦いで敗れた後、この地方から追われ、兵庫県の三田と丹波の綾部へ転封になった。島とは今も姉妹関係にある。

回る、回る、路地は回る

翌朝、我々は島の旅社が実施するプログラムの一つ、答志の「路地裏つま



「路地裏つまみ食い体験」。黄色いTシャツのかなちゃんが「ジンジロ車」を説明。

八幡神社の神聖な墨で書かれたマルハチがほとんどの家に。

み食い体験」に参加した。島東端の平地はもともと狭いので、家が軒を接して密集しており、そのあいだを狭い路地が迷路のように走る。そんな島の人たちの暮らしぶりを体験しようというのが、このツアーの趣旨である。参加したのは伊勢から来た年配の男性七人。答志島は初めてとのこと。路地裏はほんとうに狭い。向かいの家から晩ご飯のにおいが届く。軽自動車さえ入れないから、特別な小型リヤカーを使っている。市販のカートではすぐさびるので、「じんじろうさん」と



窓の数だけ玄関のわきに置かれた「あらくさいわし」

いう鍛冶屋が特注で作りはじめた。それで「ジンジロ車」と呼ばれる。荷物を運ぶ、赤ちゃん、幼児を載せて運ぶ。路地に面した多くの家の軒先には、洗濯機や洗面台が置いてある。住人は路地に立って洗濯仕事をする。魚を捌く。答志の生活は、すべて路地が中心だ。そんな路地裏を、かなちゃんは我々を案内して回り、所々で立ち止まっては説明する。家々の板戸や壁に書かれた八の字に丸の不思議な魔除けのしるし。今芽櫛の枝にいわしを刺した、安全祈願のまじない「あらくさいわし」。台風のとぎ強風に備える玄関の板戸。強い風が吹くと市営の定期船はすぐ止まる。激しい台風がくれば停電になる。これほど密集して住んでいれば、津波と火事が特に怖い。路地のあちこちに、津波のとぎ高台へ逃れる避難経路の掲示がある。火事に備えて住民の消防団は訓練を欠かさない。漁で命を



『潮騒』にも登場する洗濯場。神島は平地が少なく、急な坂道が続く。



かつて、島で唯一時を刻んでいた時計台



島の旅社の神島のメンバー、鎌田由加里さん。



桃取漁港。

落とす漁師もいるし、魔除けや安全祈願は必須だ。
島民がかつて洗濯をした井戸、島の祭り「神祭」の舞台を見たあと、海岸へ戻り海女小屋で昼食を取った。智恵さんと八〇歳の現役の海女さんが炭火を起こし、さざえ、鯖など、豊富な海の幸を焼いてくれた(トップページ見開き写真)。島の旅社のもてなしの一つである。夕方、桃取の漁港まで車で走った。雲の切れ目に夕陽を見た。

雨の神島へ

島の旅三日目は朝から雨だった。鳥羽から到着した双胴船「かがやき」に乗船し、神島へ向かう。全島の人口約四〇〇人の小さな島だが、円錐形で富士山のように形がいい。海岸から隆起しているのが、集落は斜面に建っている。迎えてくれたのは、島の旅社の鎌田由加里さん。彼女も大阪の出身である。

鳥羽で行われた婚活パーティーで、島の漁師であるご主人に会い、島がどこにあるか、どんな所か、まったく知らず結婚し、初めて島に足を踏み入れた。栈橋を出て坂道が上がると、島民に長いあいだ時を報せてきた時計台があり、洗濯場がある。答志のそれと同様、かつて島人はここで野菜を洗い、洗濯をし、井戸端会議をした。洗濯場のすぐ前には、この島をモデルにした『潮騒』を執筆するために三島由紀夫が一カ月滞在した、当時の漁業組合長寺田宗一さんの家がある。『潮騒』には、島の記憶が詰まっている。

さらに行くとも傾斜がきつくなり、八代神社の長い階段が始まる。滑るといけないので、ゆっくり上る。息が切れる。途中の宝物殿には、重要文化財に指定された奈良時代の鏡が六四面収められている。この島にこれほど多くの鏡が集まったのは、古代人の海の信仰

に関係があるのだろう。玄界灘の沖ノ島と同様。人々は海の難所を渡るとき、神の力を借りた。

神社には人影がなく、強い雨のなかで鎮まりかえっている。答志島の神社と同じように、社殿の前の簡素な拝礼所は外へ向かって大きく開き、ポリネシアの祭礼の場を思わせる。神社の先の灯台からは、伊良湖水道を通過する大型船が霞んで見えた。Uターンした我々は石段を降り、途中の集会場で一休み。九鬼の殿様が転封した三田からやって来た小学生と地元の小学生が、一緒に遊んでいる。

私は集会場で考えていた。答志島と神島のこと、島の旅社のこと。はるか昔から、これらの島は本土と海を隔てて距離をおきながら、独自の文化や伝統を育んできた。同時に外から新しい人を迎え、島の命を紡いできた。平安時代にも、戦国時代にも、かなちゃん、



さんたちが手を振る。こちらも甲板から手を振る。ことのほか名残惜しい。なるほど、島の婚活はうまくいくはずだ。島にきて知り合った男性と、こうして栈橋で別れたら、心残りがするだろう。

港の出口に近づいた、そのとき甲板の三田の子供たちが、斜め前方へ向かって一斉に手を振り出した。防波堤の端にある白い電灯の柱に、島の子三人がしがみついて、しきりに手を振っている。「また来いよー、さよーなら」。彼

らはいつの間にか栈橋を離れ、五〇〇メートルほど岸壁沿いに走って、ここで三田の子たちを待っていた。船は防波堤の突端を過ぎ、彼らの姿は後に去り、小さくなり、やがて視界から消えた。いつのまにか、雨が上がっていた。

勝代さん、由加里さん、智恵さんがやってきたはずだ。人口が減り高齢化が進む現在の島で、どうやって島独自の伝統を守り、同時に本土とつながり続けるのか。島の旅社の活動は、島が島であるためには何をしたらいいのか、何世代も続く問いかけなのかもしれない。それはまた日本という島に住む、われわれ全てへの問いかけでもある。

島との別れ

少し早く坂を下り、和具経由島羽行ききの船を定期船乗り場で待つ。まもなく沖に双胴船「きらめき」の姿が見え、港内に入って栈橋に左舷をつけた。地元の人に混じって、島を去る三田の小学生三人、送りにきた島の小学生三人が立っていた。由加里さんと別れを告げ、船に乗りこむ。

船はすぐ舷梯を上げ、エンジン音を高めて栈橋を離れた。見送りの由加里



海の神様・綿津見命を祭る八代神社。玉石の上は土足禁止。